

戯曲「ダイヤルMを廻せ！」考へ序文に代えて

三谷幸喜（脚本家）

ここでは、戯曲版「ダイヤルMを廻せ！」を上演するに当たつての、僕なりの演出ポイントを挙げていきたいと思います。とはいっても、これはあくまでも個人の意見。舞台上に巨大な仏壇を作り、その中でマクベスを上演した蜷川幸雄氏の「NINGAWAマクベス」を例に挙げるまでもなく、舞台の演出というものは、フリーダムです。そこに正解はありません。十人の演出家がいれば、十人の「ダイヤルM」があるのです。以下、徒然なるままに、思ったことを書き連ねていきます。若干、ネタバレありなので御注意。



「ダイヤルMを廻せ！」は戯曲として、非常によく出来ています。登場人物の描き分けも的確ですし、物語に無駄がなく、心情を語る長台詞も少なめ。冒頭から、切れの良いラストまで、常に緊張感が続きます。幕が降りた直後、椅子から立ち上がれないほどの感動を呼ぶ作品ではありませんが、一夜のエンターテイメントとしては申し分のない、質の高い一級のミステリーであり、戯曲だと思います。

解釈の難しい場面もないので、このまま舞台に掛けても、一定の面白さは保証されていると言っても良いでしょう。

○

白眉は第一幕第二場。トニーとレズゲイト大尉との「対決」シーンです。哀れなレズゲイトを相手に、知能犯トニーが少しずつ「詰んでいく」プロセスは非常にスリリング。この場面がうまく行けば、この舞台は成功したも同然です。

映画版で強烈な印象を残した殺人シーンは、第二幕第二場に出てきますが、舞台の場合、人が殺される場面は、実はそれほど盛り上がりません。どんなに照明や音楽で補強したとしても、実際に刺さっていないことは客席から観て明白。殺された人物のお腹が、呼吸をする度にかすかに上下しているのを、観客は観て観ぬふりをするようになります。つまり舞台においては、撃たれるとか刺されるとか殴り殺されるとか、そういったことではなく、主に人物の関係性から生まれるサスペンスが重要になってくるのです。それゆえに、先に挙げたトニーとレズゲイトのシーンが大事なのです。

○

心理劇の側面が大きいので、当然、役者の細かい演技が見所になります。上演する劇場は、あまり大きくない方が良いでしょう。東京でいえば、キャパ400人強の紀伊國屋ホールくらいがちょうど

いいように思います。



第一幕の冒頭に登場する、子細に書き込まれた舞台装置の説明。戯曲を読み慣れていない人は驚かれたかもしれませんが、これは戯曲のいわゆる「決まり事」。文章だけでは、なかなかイメージがつかないと思いますが、この戯曲には平面図も添えてあるので、それと照らし合わせて読んでいくと、分かりやすいでしょう。ここに長々と書いてあるのは、あくまで、「劇作家はこういう配置を念頭に置いてこの戯曲を書きましたよ」という「説明」。同時に「こんな場所で物語が展開するんですよ」という「決意表明」でもあります。小説と違い、戯曲は台詞とト書き（役者の動き）だけで成り立っているのです、物語が始まってから、部屋の様子をいちいち描写することはありません。そのために、あらかじめ、こうやって詳しく紹介しておくのです。

上演するに当たっては、これをすべて再現する必要はありません。劇場の大きさや、予算の規模など、芝居を上演する時は様々な制約が出てきます。それに合わせて、セットの省略が必要になってくることもあります。

この物語は、すべて「ロンドンにあるウェンデイス夫妻のフラットの居間」で展開します。時代設定ははっきり示されていませんが、恐らく戯曲が書かれた頃の「現代」、つまり一九五〇年代前半と考えてよいでしょう。

今から六〇年以上前のロンドンの高級住宅を舞台上で再現するのは、とても難しいことです。壁紙

場面

第一幕

第一場——ある九月の金曜。宵よいのころ

第二場——一時間後

第二幕

第一場——土曜の宵

第二場——その夜遅く

第三場——日曜の昼近く

第三幕

二、三ヵ月後。昼過ぎ

本戯曲は、ロンドンにあるウエンデイス夫妻のフラットの居間で演じられる。

登場人物

マーゴ・ウエンデイス

マックス・ハリデイ

トニー・ウエンデイス

レスゲイト大尉

ハバード警部

ダイヤルMを廻せ！

【第一場】

ロンドン、ウエンデイス夫妻のフラットの居間。

ある九月の金曜、午後六時二十分ごろ。

大きな屋敷を改修した集合住宅の一階。右手（左右の指定はすべて俳優側の視点による。つまり、客席から見た左右とは反対になる。舞台写真および平面図を参照）にはチャリントン街に向いたフランス窓。すぐ外には小さなテラス。床まで届く分厚いカーテンは、今は開けられている。窓の内側には鑑戸があるが、折りたたんで引っこめてあるため、ほとんど目立たない。左手、客席寄りに暖炉。マントルピースの上に置き時計。左手、舞台奥には寝室へ通じるドア。さらに奥には小さな玄関ホール。ホールの右手はキッチンに続くドア、中央奥にはフラットに入ってくるためのドア（玄関のドア）。玄関のドアにはシリンドー錠がついている。このドアが開くと狭い廊下が見え、そこを左へ向かうと、街路に面した建物の出入口。廊下にはさらに（左から右へ上る）階段があり、二階のフラットへ通じている。階段の五段目近辺が、玄関口の正面にあたる。玄関ホールの左手にコート掛け。玄関のドアの右側、ホールの奥の壁にくつつけるようにして椅子が一脚置いてある。奥の右側の壁には作りつけの棚があり、上の段には本が、下の段には酒瓶やグラスが収めてある。すなわち、本棚の下側がホームバーになっている。左側の壁にも、同じような作りつけの棚。こちらにはトニーの銀製のテニストロフィーが並び、上の段にはテニスラケットが置かれている。この棚を挟んで、両側の壁にテニスの写真が飾られている。奥の右隅にはフロアスタンド。右手中央にはテーブルにも使

えるフラットデスクがあり、電話と住所録、スケジュール帳が載っている（電話はデスクの舞台奥側の端にある）。デスクの椅子はフランス窓を背にしている。デスクのそばには屑籠くずかご。左手中央にソファ。その右にスツール。ソファの後ろには長方形のテーブルがあり、銀の煙草入れと灰皿、花瓶が載っている。左手、客席寄りに椅子が一脚。その後ろに小さなウォール・テーブル、その上にストッキングや鉄てつなどの詰はまった裁縫籠さいほうかご。ソファの足元に低いコーヒーターブル。

居間中央の上方にシャンデリア（もしくは上からの照明）。左手の壁、暖炉の上方にブラケット灯がふたつ。どちらも玄関ホールのドアの右にある照明のスイッチで点灯、消灯する。フロアスタンドのスイッチはスタンド本体についている。

外がまだ明るいため、今のところ電灯はつけられていない。しかしその明かりは、マックスとマーゴによる冒頭の場面の最中に薄れはじめる。

炬火はあかあかと燃え、玄関のドアは閉まっている。

幕が上がると、マーゴがマックスへ飲み物を手渡そうとしている。ふたりはソファに腰を下ろしている。マーゴはふいに物音を聞きつけ、立ち上がって玄関のドアへ近寄り、細く開けてすばやく外の廊下を覗く。またドアを閉め、マックスへ向き直る。

マーゴ（少し不安そうに）もしかしたら、トニーかもしれないと思って。話の腰を折ってごめんなさい。なんの話だったかしら——？

マックス きみと最後に会ってから、ぼくが五十二人の人間を殺したって話だよ。

マーゴ（笑いながら、コーヒーターブルの飲み物を手にとる。ソファに腰かける）ああ、そうだったわ——週にひとりの勘定ね。どうやってなさったの？

マックス 考えつくかぎり、ありとあらゆる方法でさ。浴槽で感電死させたり、ガレージに閉じこめて自動車のエンジンをかけっぱなしにしたり、窓や崖から突き落としたり。また別のときには、毒殺なんてのもありだったね。あとは射殺に絞殺、刺殺、撲殺。それから窒息死。

マーゴ つまり、気の向くままってこと？

マックス テレビの脚本ほんを書くのに、気が向くだの向かないだのと言っている暇はないよ。

マーゴ アイディアはどこから仕入れていらっしやるの？

マックス そうだな——新聞記事とか、警察の資料とか——たちの悪い夢だとか——ほかのやつ書いたものだとか——

マーゴ たしか以前、独創性のないものは絶対に書かないとおっしゃらなかった？

マックス まあね——でもさ、年に五十二回も独創性を求められてごらんよ！

マーゴ からからに干上がってしまつて、何も出てこなくなつたら？

マックス そうなつたら、シルクハットを使うだけさ。

マーゴ え？

マックス ぼくはね、三つのシルクハットを持つてるんだ。それぞれにはこう書いてある——誰が誰を殺したか、どうやったか、どうしてか。

マーゴ どういうこと？ 「どうしてか」って。

マックス 「どうしてか」っていうのは、殺しの動機のことさ。殺人には動機がつきものだ。おもな

ものは五つしかない。恐怖——嫉妬——金——復讐——それに、愛する者を守ること。それらを紙切れに書いて、どうしてかのシルクハットに入れ、適当に一枚引くんだ。

マーゴ　まるで、一週間分のお洗濯物をより分けるみたい。

マックス　芸術性から言えばいい勝負だね。稼ぎはいくらかまっただけだ。いらいらの募る程度も、上演のあてのない戯曲や、出版されそうもない小説を書くのと変わらないし。それから、忘れちゃいけない。スポンサー様の広告に嘘偽りがなければ、証明するのにひと役買えるのさ——キラリ輝く歯でガブリ、まともになれば友去らず、まとも、ってね。

マーゴ　（笑う）お代わりはいかが？

マックス　いや——もう結構だよ。ありがとう。

マーゴ　電話口からあなたの声が聞こえてきても、ちよつと信じられなかったわ。わざわざニューヨークからかけてくださったの？って。

マックス　きみは驚いたせいかな、ちよつと声が大きくなっていったね。実のところぼくは、この目と鼻の先にいたんだだけ。（間。心配して）ところで、かまわなかったのかな——あんなふうに電話をかけても。

マーゴ　ええ、もちろん。

マックス　電話に出たのが——トニーかい？

マーゴ　ええ。（ぎこちない間）あまり遅くならないといいんだけど。かわいそうな人。お芝居を観に行く日は、きまつて用事に捕まるんだから。（間）それじゃあ今回は、お休みでいらしたわけじゃないのね？

マックス うん、今回はね。短編のテレビ映画の脚本を書きに来たんだ。それが終わったら、いよいよ一年間の休みをとって、例の小説にとりかかるともりさ。いつかは書かなきゃいけないからね。

マーゴ やっぱり犯罪もの？

マックス 犯罪には、こだわらざるを得ないだろうな——ぼくの売りはそこだから。殺人ものだからって、ほかの小説に劣っているわけでもないしね。時間さえとれば、いいものが書けると思うよ。飛行機の中でいけそうな手口を思いついたんだ。一卵性の双子がいて、ひとりはパリに、もうひとはニューヨークに住んでる。そして突然、ふたりともが決意するんだ——

マーゴはそわそわとして、心ここにあらずといった様子になる。

マーゴ (さえぎって) お話ししなくちゃいけないことがあるの。トニーが帰ってこないうちに。

マックス うん？

マーゴ わたしたちのこと、あの人に言っていないのよ。

マックス え？

マーゴ 昨日お電話いただいたときには、あなたはテレビの脚本をお書きの方で、あの人のアメリカ遠征中に知り合ったと言ったの。

マックス ふうむ。まあ、その通りだね。

マーゴ それで、あなたがニューヨークへ帰られるときにもう一度お会いして。そのときあなたが、こうおっしゃっていたと話したの——もしまたロンドンへ来ることがあったら、かならずお宅を訪

ねますって。

マックス なるほど。

マーゴ ばかな言い訳をとお思いよね。けれどもトニーにお会いになれば、きつとあなたにもおわかりになってよ。

マックス マーゴ、ひとつはつきりさせておきたいんだが。(立ち上がり、ソファの肘掛けに腰かける) きみとトニーとのあいだは、今うまくいつているのかい？

マーゴ ええ、これ以上ないほどよ。(熱をこめて) わたし、今の暮らしを変えたくないの。

マックス (うなづく) 喜ばしいことだよ——きみのその気持ちに慣れられれば、きつと喜べると思う。

マーゴ (ほっとして) ありがとう。

マックス (軽く) ほかならぬきみのためだからね。

マーゴ 実は、まだあるのよ。

マックス うん？

マーゴ あなたには言わないつもりだったんだけど——

マックス なんだい？ 言ってごらん。

マーゴ 憶えていらっしやる？ あなたがくださったお手紙。

マックス もちろん。

マーゴ 読んだあとは燃やしていたの。そのほうがいいと思って。でも、一通だけはとっておいたの。どれのことか、おわかりになるでしょ。

マックス 見当はつくね。書くべきじゃなかったけれど。

マーゴ そうよね。それでも、わたし嬉しくって。どこへ行くにも、かならず持ち歩いていたの。あるとき、主人と郊外のお友達の家で週末を過ごすことになって、プラットホームで列車を待っていたら、ハンドバッグがないことに気がついて——それに手紙を入れていたのよ。

マックス それは——どの駅だい？

マーゴ ヴィクトリア駅よ。食堂に置き忘れたとばかり思ったんだけど、捜しに戻ってみても、もうなかったわ。

マックス それで、まだ見つかっていないんだね？

マーゴ 二週間経って、遺失物取扱所からハンドバッグは戻ってきたわ。でも、手紙は消えていたの。(間) それから一週間して、脅迫状が届いたの。手紙を返してほしければ、言う通りにしろって。

マックス どうしろって？

マーゴ わたしの銀行口座から五ポンド札で五十ポンドおろして、使い古しの一ポンド札に替えろって。警察に届けたり、ほかの誰かに喋ったりしたら——主人に手紙を送るって。

マックス 見せてくれるかい。(マーゴは寝室へ姿を消す。マックスは立ち上がり、室内を落ち着かなげに歩き回る。ソファの後ろのテーブルの銀の煙草入れから一本取り出し、火をつける。マーゴが白い封筒を二通手にして現われ、片方をマックスへ手渡す。マックスは中の手紙を取り出し、目を通す) すべて大文字の活字体で書いてある、か。これじゃあ筆跡もわからないな。

マーゴは、マックスへもう片方の封筒を手渡す。

〔著者〕

フレデリック・ノット

本名フレデリック・メイジャー・ボウル・ノット。英国の劇作家・映画のシナリオライター。中国、漢口生まれ。ケンブリッジ大学卒。映画の脚本家を目指し、映画会社に勤務した後フリーランスに。『ダイヤルMを廻せ!』で劇作家としてデビュー。主な脚本作品に「Write me a Murder」、「Wait Until Dark」など。

〔訳者〕

圭初幸恵（けいしょ・さちえ）

北海道大学文学部文学科卒。インターカレッジ札幌で翻訳を学ぶ。訳書にピーター・テンプル『シューティング・スター』（柏艚舎）、フレドリック・ブラウン『ディープエンド』『アンブローズ蒐集家』マイルズ・バートン『素性を明かさぬ死』（以上、論創社）がある。

ダイヤルMを廻せ！

——論創海外ミステリ 211

2018年5月20日 初版第1刷印刷

2018年5月30日 初版第1刷発行

著者 フレデリック・ノット

訳者 圭初幸恵

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

ISBN978-4-8460-1725-5

落丁・乱丁本はお取り替えいたします